ピアノ個人レッスンにおける

ＩＣＴ利用による効果的な指導と自主的な学習への導き

田中敬子・兵庫大学短期大学部
兵庫県加古川市平岡町新在家2301
TEL ： 079-427-5111(代表)
E-mail：tanaka-k@hyogo-dai.ac.jp

【概要】

2020年度Ｉ期より、90分のピアノの授業で同時に10名の音楽教員が学生を約4名ずつ担当し、大学独自のグレード制に基づいてZoomによる個人レッスンを行っている。指導方法や評価の整合性を担当教員全員で熟考・周知し、学生の自主的な学習へ繋げる工夫を行った。対面レッスンを行っていた時と比べ、授業時間の使い方が効率的になり、授業方法も対面レッスンの時には行えなかったグループワークも可能となり、学生の自主的な学習意欲が促進され、結果として成績の上昇が明らかとなった。

キーワード： ピアノ ・ オンラインレッスン ・ グレード制 ・ Zoom ・ 分析

１．教育改善の目的・目標

2020年4月より、コロナ禍のため、大学の授業がオンライン（以降ICTと表記する）で行われるようになった。それまではピアノの授業をICTで行った経験がなかったため、10人の音楽教員と下記①～⑤の問題を解決するために、くり返し話し合いがされた。

①ICT利用で如何にしてピアノ演奏技術の向上を図るか
②楽器の違い（本物のピアノと電子ピアノ）による指導の工夫
③個人レッスンの時間の確保、90分授業の効率的な時間の使い方
④音楽教員10名が学生を分担して同時間に授業を行うため、指導内容や評価の整合性の持ち方
⑤ICTでの評価方法の工夫

これらの問題を協議したうえで、教育の目標を次の4項目とした。

・ICT利用によるピアノ演奏技術の更なる向上（対面授業以上の向上を目指す）
・学生の自主的な学習への導き（ICTの積極的な利用）
・学生自らが学習の到達目標を知り、自ら努力できる授業方法の構築（グレード制の周知）
・学生の学習意欲を引き出す評価方法と学生への周知（評価方法の周知とコミュニケーションの強化）

２．授業概要と教育改善の内容

(1).授業概要

本学で行っているピアノの個人レッスンは、「器楽A」「器楽B」「音楽教育C」「音楽教育D」の4科目であるが、本稿ではグレード制に基づき授業が行われている「器楽A」と「器楽B」について述べる。

1年次に半期開講される「器楽A」の単位が取得できた学生が次の半期に「器楽B」を履修することがで「器楽A」で取得したグレードをそのまま「器楽B」に引き継ぐ。

授業概要について本学シラバスより「器楽A」と「器楽B」を纏めて次ページ表1に示す。また、本学で用いているピアノのグレードについて表2に示す（合格必須の弾き歌い20曲を含む）。グレードはB（ベーシック）コース、A（アドバンス）コース、S（スーパーアドバンス）コースの3つがあり、学生は任意でコースを選べるようにしている。学習の途中でコース変更も可能である。初心者でバイエルを抜粋で学習するのがBコース、バイエル後半全てを学習するのがAコース、バイエル後半全てを速習で学習するのがSコースとなっており、成績はBコース→Aコース→Sコースの順で高くなるように設定している。

表1「器楽A」「器楽B」の授業概要

授　業　概　要	15 回全ての個人レッスン(ピアノ)を Zoom のオンラインで行う。 保育現場では子どもの様子を見ながらピアノを演奏、弾き歌いをするため、ピアノ演奏の十分な力を身につける必要がある。 ・器楽Aでは音楽活動の基礎技能を身に付ける。 ・器楽Bでは器楽Aに引き続きピアノ曲と弾き歌いのレパートリーを増やし、音楽活動の基礎技能をさらに高める。		
3つのディプロマポリシーの能力 及び 授業の到達目標	1) 専門的知識や技術を習得し、活用しようとする力 (器楽A)バイエル70番以上の曲を弾くことができる。 (器楽B)バイエルが修了し、弾き歌いのレパートリーが20曲以上ある。 2) 自らの実践を振り返り、自己を高めようとする力 レッスンやグレード試験での自分の演奏を振り返り、技能や表現力をさらに高められるよう工夫して練習できる。 3) 自己を分かりやすく表現しようとする力 保育現場の子どもたちの様子をイメージしながら、演奏することができる。		
授業外学習	・ピアノ曲、弾き歌い曲ともに、各自毎日十分な練習を行い、完成度を高くしてレッスンを受けるようにすること。 ・弾き歌いは、幼児教育現場での歌唱指導の場面も意識しながら練習すること。		
評価方法	発表・実技：100%		
単位数	各1単位	履修者概数	各70 ～ 80 名

表2　グレードのコース一覧と合格必須の弾き歌い20曲表

ピアノグレード【B（ベーシック）コース】一覧表

グレード	ピアノ	弾き歌い
Ⓑ1	「バイエル」No.45～No.59 （No.53 と No.54 は除く）の中から任意の２曲	器楽Ｂ修了時までに必修曲すべてを合格すること。 必修曲すべてを合格した後は、自由曲で受験すること。
Ⓑ2 ＊器楽Ａクリアー必須	「バイエル」No.60・No.61・No.62・No.65・No.66・No.67　の中から任意の３曲	
Ⓑ3	「バイエル」No.72・No.73・No.75・No.76・No.77・No.78・No.79・No.83・No.84・No.85 の中から任意の３曲	
Ⓑ4	「バイエル」No.88・No.89・No.90・No.91・No.93・No.94・No.95・No.96・No.97・No.98 の中から任意の３曲	
Ⓑ5 受験必須グレード ＊器楽Ｂクリアー必須	「バイエル」No.80・No.81・No.82・No.99・No.100・No.102・No.104・No.105 の中から任意の３曲	
Ⓑ6Ａ （飛ばして６Ｂ受験可）	「ブルグミュラー２５の練習曲」No.5・No.6・No.7・No.8・No.10・No.11・No.16・No.17・No.18 の中から任意の１曲	
Ⓑ6Ｂ	「ブルグミュラー２５の練習曲」No.9・No.12・No.14・No.15・No.20・No.21・No.22・No.23・No.24・No.25　の中から任意の１曲	
Ⓑ7Ａ （飛ばして７Ｂ受験可）	「ソナチネアルバム１」4-1（No.4 の１楽章）・4-2・5-1・6-1・8-1・8-3・9-3・17-1 の中から任意の１曲	
Ⓑ7Ｂ	「ソナチネアルバム１」5-3（No.5 の３楽章）・6-2・9-1・10-1・11-3・12-1・14-3・15-1・15-2・17-2　の中から任意の１曲	
Ⓑ8	自由曲	
Ⓑ9	自由曲	
Ⓑ10	自由曲	
Ⓑ11	自由曲	
Ⓑ12	自由曲	

ピアノグレード【A（アドバンス）コース】一覧表

グレード	ピアノ	弾き歌い
Ⓐ1 ＊器楽Ａクリアー必須	「バイエル」No.60～No.69 試験当日３曲指定	器楽Ｂ修了時までに必修曲すべてを合格すること。 必修曲すべてを合格した後は、自由曲で受験すること。
Ⓐ2	「バイエル」ト調長音階～「バイエル」No.79 試験当日３曲指定	
Ⓐ3	「バイエル」No.80～No.89 試験当日３曲指定	
Ⓐ4	「バイエル」No.90～No.98 試験当日３曲指定	
Ⓐ5 ＊器楽Ｂクリアー必須	「バイエル」No.99～No.105 試験当日３曲指定	
Ⓐ6Ａ （飛ばして５Ｂ受験可）	「ソナチネアルバム１」4-1（No.4 の１楽章）・4-2・5-1・6-1・8-1・8-3・9-3・17-1 の中から任意の１曲	
Ⓐ6Ｂ	「ソナチネアルバム１」5-3（No.5 の３楽章）・6-2・9-1・10-1・11-3・12-1・14-3・15-1・15-2・17-2　の中から任意の１曲	
Ⓐ7	自由曲	
Ⓐ8	自由曲	
Ⓐ9	自由曲	
Ⓐ10	自由曲	
Ⓐ11	自由曲	
Ⓐ12	自由曲	

ピアノグレード【S（スーパー）コース】一覧表

グレード	ピアノ	弾き歌い
Ⓢ1 ＊器楽Ａクリアー必須	「バイエル」No.60～No.79 試験当日４曲指定	器楽Ｂ修了時までに必修曲すべてを合格すること。 必修曲すべてを合格した後は、自由曲で受験すること。
Ⓢ2	「バイエル」No.80～No. 98 試験当日４曲指定	
Ⓢ3	①「バイエル」No.99～No.105 試験当日４曲指定 ②　初見視唱１曲（子どもの歌の歌のみ）	
Ⓢ4 ＊器楽Ｂクリアー必須	①「ソナチネアルバム１」より任意の２つの楽章 ＊２つの楽章は同一曲とする ②　初見演奏１曲（子どもの歌の伴奏のみ）	
Ⓢ5	①「ソナチネアルバム１」より任意の２つの楽章 ＊２つの楽章は同一曲とする ②　初見弾き歌い１曲（子どもの歌の弾き歌い）	
Ⓢ6	①　自由曲 ②　初見視唱１曲（コールユーブンゲン） と初見弾き歌い１曲（子どもの歌の弾き歌い）	
Ⓢ7	①　自由曲 ②　主要三和音の伴奏付け１曲 （ハ長調、ト長調、ヘ長調のいずれか）	
Ⓢ8	①　自由曲 ②　主要三和音の伴奏付けによる弾き歌い１曲 （ハ長調、ト長調、ヘ長調のいずれか）	
Ⓢ9	①　自由曲 ②　音名唱と階名唱１曲（子どもの歌より）	
Ⓢ10	①　自由曲 ②　移調奏１曲（ハ長調から長２度上へ） ＊子どもの歌より	
Ⓢ11	①　自由曲 ②　移調奏１曲（ニ長調から長２度下へ） ＊子どもの歌より	
Ⓢ12	①　自由曲 ②　移調奏１曲（ハ長調から同主調へ） と演奏曲に関する口述試験	

（弾き歌い20曲）

弾き歌い必修曲

① 朝の歌
② おかたづけ
③ せんせいとおともだち
④ あくしゅでこんにちは
⑤ チューリップ
⑥ 大きな栗の木の下で
⑦ かえるの合唱
⑧ かたつむり
⑨ たなばたさま
⑩ きらきら星
⑪ とんぼのめがね
⑫ どんぐりころころ
⑬ 山の音楽家
⑭ まつぼっくり
⑮ 手をたたきましょう
⑯ とんとんとんとんひげじいさん
⑰ むすんでひらいて
⑱ いとまき（糸まきまき）
⑲ バスごっこ
⑳ おばけなんてないさ

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

1. 必修曲から受験する。必修曲が全て合格した場合は、自由曲で受験する。
   (ア) 必修曲を全て合格し、自由曲の弾き歌いが合格した場合は、合格数により加点となる。
   (イ) 自由曲は、２冊の教科書から選曲すること。
2. 必ず前奏をつけること。

(2). 改善内容

対面授業を行っていた時は、グレード試験は授業時間外に6回と15回目の授業時の計7回を半期に実施していた。15回目の授業時間内の試験以外に実施されるグレード試験の受験は学生の任意である。

2020年度にICTによるピアノレッスンになってからは、感染状況からグレード試験を対面で実施する

ことが困難となり、15回のICT授業内でグレード試験を実施する必要が生じた。対面でのグレード試験では、各グループの受験者8名と教員2名が同室で演奏を聴き、合否を試験直後に発表する方法で行っていた。2020年度からは15回の授業のうち8回目を「合同試験」とし、2名の教員が合同で担当学生全員を受験させて、演奏者だけがZoomのビデオと音声をオンにし、教員と他の学生はビデオと音声をオフにした状態で受験者の演奏を聴く方法をとった。しかし、以前のように授業時間外も使って7回の受験の機会を作ることは、時間割上と受験申込手続きが困難であるため、毎回のICTのピアノレッスンの授業時間内で担当教員が学生の修得度をチェックし、合格に達していれば合格と判定する方法をとることにした。合格、不合格の基準は、全教員がそれまでの対面のグレード試験の審査を十分に経験済みのため、担当教員による審査の不公平は生じないと判断できた。教員と学生には、毎回のレッスン内容を記録できる『レッスン記録表』を授業支援システム（manaba）で配布し、さらに教員には毎回のレッスンで担当学生の合格結果を記録する『レッスン内テスト結果入力一覧表』も配布した。

1章の④に提示した「音楽教員10名が学生を分担して同時間に授業を行うため、指導内容や評価の整合性の持ち方」と、同じく1章の⑤の「ICTでの評価方法の工夫」については上記の内容に音楽教員全員で決まった。②の「楽器の違い（本物のピアノと電子ピアノ）による指導の工夫」は、自宅の電子ピアノの鍵盤数が極端に足らない学生、自宅のWi-Fi環境が整っていない学生、本物のピアノで授業を受けたい学生は、大学のピアノレッスン室から大学のWi-Fiを使って授業に入れるように配慮した。

もっとも音楽教員全員で熟考すべきことは、①の「ICT利用で如何にしてピアノ演奏技術の向上を図るか」と、③の「個人レッスンの時間の確保、90分授業の効率的な時間の使い方」であった。まず教員全員がZoomの使い方を熟知する必要があったため、Zoomで教員全員が集まり、約3週間かけて実際の授業のシミュレーションを繰り返し行った。大学のレッスン室はピアノが1台であるため、教員が弾いて指導するには学生が弾いているピアノを使わなくてはならないが、ICT活用双方向型授業では学生と教員相互が弾きあうことができる。また、Webカメラの複数利用や画面共有の効果的利用、メインルームとブレークアウトルームのメリハリのある活用により、学生のレッスン室の移動、出入りの時間が不要となり、大学のレッスン室では困難であったグループワークもICTでは容易に取り入れることができ、学生が90分の授業時間を十分に練習に充てることができると考えられた。毎回のレッスンで従来のグレード試験に当たる修得度チェックを行うため、学生が合格を目指して自主的に学習することも期待された。また自宅学習を促進するために、入学前教育の時点から、筆者のYouTube「バイエル練習サポート動画」[1]を学生に周知させていた。

３．教育実践による教育効果とその確認

(1).グレード取得の比較

本章では2章の(2).で述べた改善内容を実践した結果を、対面レッスンのみでICTを利用していなかった2019年度入学生と、ICTを利用してレッスンを行った2020年度入学生のグレードの取得状況を、図1で「器楽A」を、図2で同じ学生が引き続き履修した「器楽B」の結果を示す。棒グラフのグレーが対面レッスン(78名履修)、ブルーがICT利用によるレッスン（77名履修）の結果である。

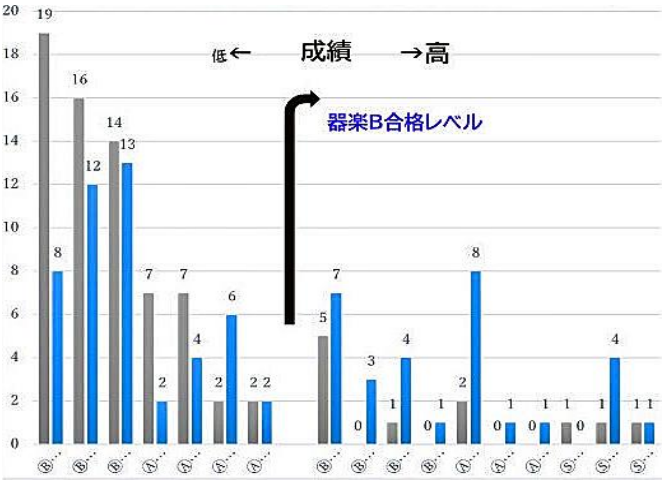

図1　器楽A・対面とICTの取得グレード比較

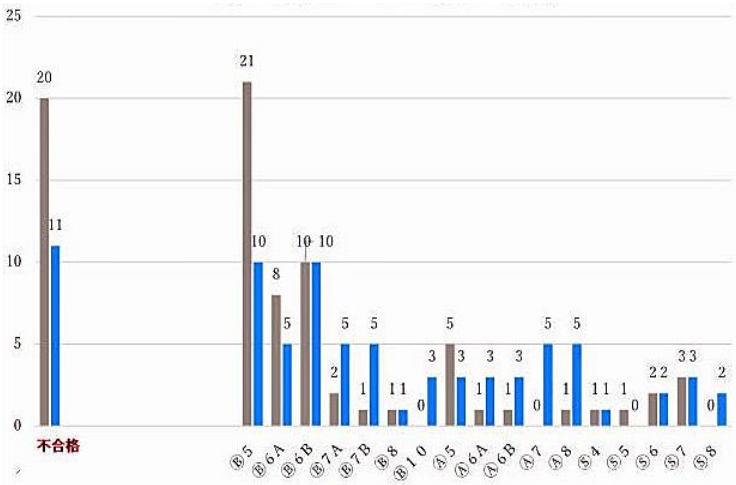

図2　器楽B・対面とICTの取得グレード比較

「器楽A」修了時に次の半期に開講される「器楽B」の単位取得に必要なピアノグレードが既に取得できている学生の割合は、対面:14%、ICT39%である。「器楽B」修了時に単位が取得できなかった不合格者の割合は、対面:26%、ICT:14%で半減に近い。また、単位取得に必要な最下位のグレード(Bコースの5)で合格した学生

の割合は、対面:27%、ICTでは13%であり、対面では不合格者と最下位のグレードで合格した学生が合わせて53%であるのに対して、ICTでは不合格者と最下位のグレードで合格した学生は27%であり、残りの73%は上位のグレードを取得したことになる。また、3つあるグレードのコースの中で、より上級のAコースとSコースでグレードを取得した学生の割合は、対面:19%、ICT:35%であり、ICT利用によるレッスンを受けた学生の方が、より上位のグレードを選んだことが分かる。

(2). 弾き歌いの合格数の比較

弾き歌いは「器楽B」修了時までに、必須の20曲を合格しなくてはならないが、それ以上の弾き歌いを合格した場合は、1曲合格につき成績に1点加点される。「器楽B」修了時に合格した弾き歌いの数と学生数を図3に示す。「器楽B」不合格である20曲未満が、対面:24名、ICT:13名で半減に近い。弾き歌いの合格数の平均は、対面:20曲、ICT:27曲である。最高合格数は、対面:43曲、ICT:53曲である。

4. 結果の考察

対面レッスンとICT利用によるレッスンでは、グレード試験の回数も方法も異なるが、ICTによる教育が自主的な学習を導いたことが分析データから読み取れる。

前ページ図2から「器楽B」修了時には、対面では単位取得に必要な最下位のグレードⒷ5を合格したあと、自主的に更に上のグレードを目指す学生は少なかったことが分かる。しかし、ICT利用では単位取得に必要な最下位の取得にとどまらず、更に上のグレードを取得する学生が多いことが分かる。図3からは、弾き歌いの合格数の平均は、対面では器楽Bの単位取得に必要な20曲であるのに対して、ICTでは27曲である。このデータから、ICTでは学生が更に上を目指し、自主的に学習したことが分かる。前ページの図1と図2および、図3を合わせて分析すると、ICTによる教育が自主的な学習を導くことに成功していると言える。

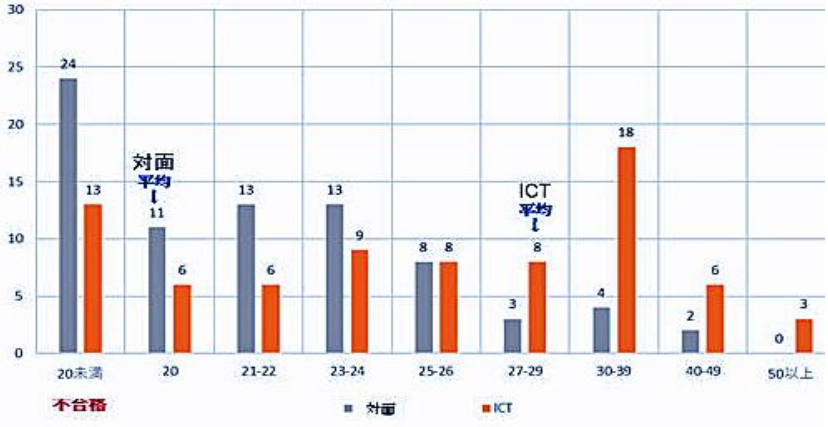

図3　弾き歌い合格数の対面とICTの比較

2021年6月18日にICT利用のレッスンを受けた学生61人にアンケート調査を実施した。

①オンラインレッスンで思っていたよりも成果が出た(力が付いた)と思う[はい:98%　いいえ:2%]

②90分の授業時間を有効に使えたと思う[はい:97%　いいえ:3%]

③初心者もオンラインレッスンで対面レッスンと同じように力が付くと思う[はい:84%　いいえ:16%]

いいえと回答した学生の理由は、

- イヤホンが邪魔、回線が悪い時があった
- オンラインだと質問しにくい
- 自信がないので教員に側にいてほしい
- 教員から自分の指が見えにくそうだった
- 鍵盤の位置が分かりにくい
- 初心者では指の動かし方をもっとそばで見たいと思うので、弾き方が伝わりにくいかもしれない

（経験者からのコメント）

などがあった。ほとんどはICTのWi-Fi環境、Webカメラなどの設備を改善すれば解決できる理由である。

本授業で使用したアプリはZoomであるが、音楽の授業で使用するには若干の問題があった。それは全く同時に演奏すると、音が聴こえるまでに時間的に少しのズレがあることである。そのため、同時にアンサンブルをすることはできない。音質に関しては、音楽用マイクを教員が使用することで、ある程度改善されるが、上級者の表現指導では教員側が「このような響き、ペダリングで弾いているのではないか」と想像して指導する必要がある。

今後、ICTの技術革新が更に進化し、我が国の教育機関のインフラが強固に整備され、これらの問題が解決された時には、ICT利用による音楽教育は飛躍的発展を遂げると考えられる。また、音楽に限らずICT利用による教育の充実は、教員の働き方改革のみならず、これからの多様な社会を切り拓き、広く社会や世界と関わりの中で活躍していく若い世代の能力を、一層向上させることにつながると考えられる。

謝辞

本研究を進めるにあたって、兵庫大学短期大学部の音楽教員の皆様には、学生のアンケート実施にご協力を頂き、ここに御礼を申し上げる。

関連URL

[1] YouTube「バイエル練習サポート動画」アカウント名:keiko tanaka
（バイエル　解説　練習サポート 再生リストURL）
https://www.youtube.com/watch?v=M_9zSMmEroM&list=PLMtrZtnm9C0izZSoxJjbLdawypEDkVmzN